

12月が終わる頃に

1年の終わりを迎える12月のある日のこと。こぐまのマロン君。いつものように目を覚まし、カーテンをあけました。すると窓ガラスのむこうは、白い世界が。「あ、雪が降った」と喜びの声を上げたマロン君は、急いでパジャマから外着に着替えると、朝ごはんを食べずに家を飛び出しました。「夕方までには帰ってきなさいね～」というお母さんくまの声を背に、マロン君は森へと急ぎました。

雪が止んだ後の森の中は、静かでした。ザクザクと足音をたてては、雪の中に消えていきます。毛皮についた雪はやがてとけ、水となり、そして森の中の雪に染み込んでいきました。

マロン君が急いだ理由がありました。それは…。

森の中にあるある大きな木。その木は不思議な木でした。なんと、雪が降ったあとにしかみることができない「花」を咲かせるのでした。古くから森に住む長老くまのおじさんの話から、この花の存在を聞いていました。「いつか見れる日が、くるといいの」と。

大木のそばには、まだ誰の足跡もついていません。マロン君は、そっと木の幹に寄り添いました。耳を当てると、木の中からドクドクと流れる生命を感じられます。マロン君が見上げたとき、それは起こりました。さりげなく風が服と、空からキラキラと光る金粉が舞い降りました。

「わああ」小さく感嘆の声をあげたマロン君。それに呼応するように、光はキラキラと踊るようにマロン君のそばにふりそそぎました。そして、光の間にさらに光るピンク色の花がみえたとき、マロン君はその花の輝きをみつけました。いつか見られるこの花をみたとき―「幸せがきっと訪れるだろう」おじいさんの声が、どこからともなく聞こえてきたような気がしました。おしまい。（了）

あとがき

久しぶりに書き下ろしの物語です。じつはこれを書こうと思ったのは、数日前くらい。言葉にできない思いが、煙から言葉にすることができました。表現的には難しいですが、そういう思いがちょっとのった作品です。だからずっと考えて書く、というより。ぱぱっとひらめきで書くことが多いのがこの物語・この物語の主人公は、わたしの思いにちょっと期待をこめて動いてくれます。それがうれしい。こういうちょっとした話を書きたくて、はじめたのが「こぐまのマロン君」。はじめはファンタジー小説にしていたのですが、最近は日常の発見や幸せを、くまの目線を通して書いています。

ネット小説が主流になったいま。こういう小説ならば、ブログやHPでさっと出すことはできます。だけど、ネット小説があるのに紙にしているのは、紙に書きおこして読む楽しさや、そこに見えるものを、紙で味わってほしいな、と思ったからです。サークル活動は、仕事の合間に続けてきて早10年以上たちました。10年くらいたつと、だんだんといつからはじめた。とか。そういうことが気にならないくらい、ほんと自然に活動しているし、日常のひとつになっています。そういう状態になれたのも、こうして読んでくださっている読者の方のおかげです。「蔓庵」としてサークル活動を一緒にしてくれている相方の銀灰さんの支えがあり、こうして私も自由に書かせてもらっているのだな。と強く思いをこめて、この物語のあとがきとさせていただきます。次回もまた会えますように。

2018年12月吉日 かずら

12月が終わる頃に

発行日：2018年12月29日

発行：かずら（蔓庵）

HP「蔓庵」<https://kazrafugetsu416.jimdo.com/>